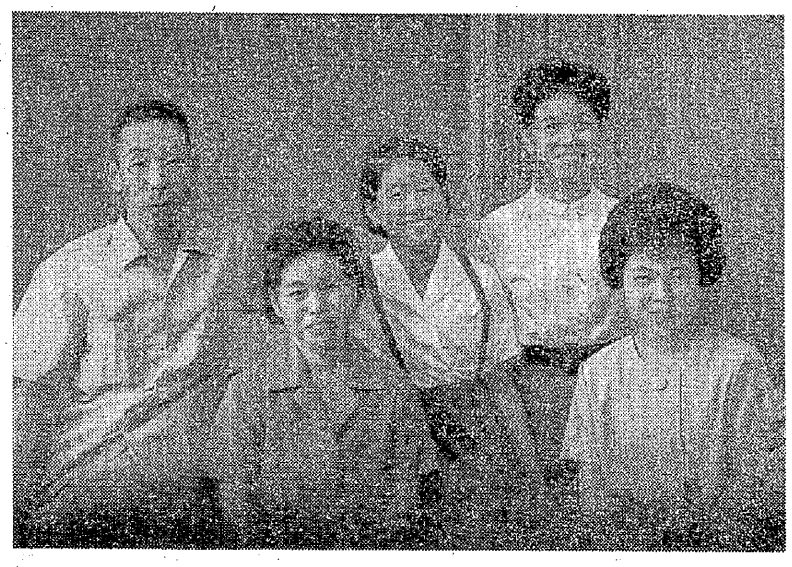
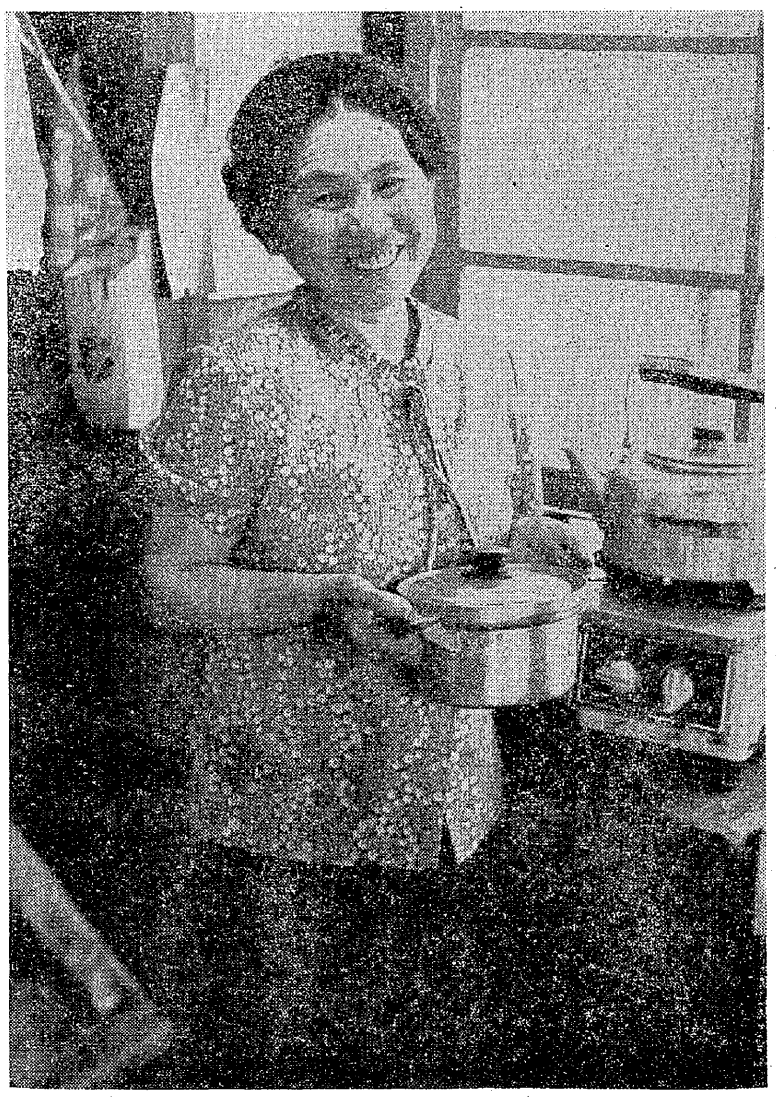
原告団

遺族・CO裁判　災害責任追及、特集号

第百二十一号



昭和37年8月16日、家族みんなで。故人最後の面影を伝える。



遺族―古江タケオさん。勤めから家に帰ると、さっそく夕餉の仕度。いっしょにいてくれる三女の豊子さんの分と二人まえ。今夜はどんなダンランとなるかな？

原告団レポート

遺族――

古江タケオさん

脚を棒に編立て作業

でも、屈託がないおおらかなその人柄

折角帰ってきた夫だったのに

その人柄は

三池の遺族の一人――古江タケオさんは、例に洩れず惨たんたる生きざまに奔弄されてきた人とは見えないほど、屈託がない。住まいは荒尾市緑ケ丘社宅桧町二十八棟で、ともに住む三女の豊子さんは、「ぼんとにお母さんはのんきかア」と笑うが、タオオさんはいう――「ものごとをいちいち気にしよるなら、とても生きてどまいかれん」。

きっとそうだ。いきなり襲いかかってきたとてつもない悲運に、さんざん涙をしぼりながらからくも生き抜いてくることのできたその歩みこそが、今日のタケオさんの、おおらかにもとれる人柄をつくりあげたのに違いない。

編立て仕事

タケオさんは、三池大爆発のとき死んでいった、明治四十四年九月六日生まれの亡夫＝語さんより四つ歳下だ。大正四年十月十五日生まれだから今年六十三歳になる。

語さんから託された家族といえば、女の子どもばかり三人。長女峰子さん三十六歳（昭和十七年六月三日生まれ）。次女美佐子さんが三十四歳（十九年八月三日生まれ）で、三女豊子さんが二十九歳（二十四年十一月八日生まれ）。

といっても、長女の峰子さんと次女の美佐子さんはすでに他家に嫁し、子どもも恵まれ、それぞれに家庭を築いている。従って、今母親のタケオさんと暮らしているのは、三女の豊子さんだけ。彼女は毎日、市内の一企業に働きに出ているのである。

タケオさんは前述した通り、今六十三歳。それでも、大災害の翌三十九年の四月から荒尾市の炒見に創業した誘致企業の一つ――荒尾アソニットで働いている。仕事は編み立て。電動編み機を使って、一日じゅうセーター編み。

タケオさんは、他の遺族仲間とともに操業と同時に入社。以来、編み立ての仕事で通してきた。

「入社したころはまだ若く（といっても五十歳だったが…）、一日に四十枚のセーターが編めたものでしたけど、今は二十枚もあがらんときさえあります」

彼女はいうが、この仕事一日編み機の前で立ち通し。おまけに休憩時間は一日のうち、昼の四十五分間だけだというから、高齢の女には重労働のはず。

「昼からは、脚が棒のようになります。そこに五分間でも休みがあったらと思いますけど。ただ体が強いおかげで、月づきほとんどくのが、「何も知らない人びとにはさぞおかしかったことでしょう」、と述懐するタケオさん。太平洋戦争終結前年の、それは昭和十九年七月のことだった。

泣く泣く…

張河口といえば、何といっても中国大陸の奥地。汽車にゆられて北京までの道程が二日。そこで汽車を乗り換えると、朝鮮の釜山まで一週間。こんとは関釜連絡船で母国の下関まで一昼夜。

戦時下で物資欠乏の折り、母親の自分はともかく、まだ幼い峰子さんに食べさせるものはといえば、はじめの数日間こそ用意してきたおにぎりや菓子の類があったものの、あとの三日間は口にいれてやるものは何もなかった。ときには大人ながらとうとうこらえきれず、おいおい泣きじゃくってはお茶を与え、満腹させたという。

百姓暮らし

母国で、タケオさんが傷心の身を寄せたのは、熊本県下の一寒村――今は山鹿市津留の、夫語さんの実家だった。

農家だった。すでに父親喜作さんは世に亡く、母と義兄嫁にその子どもたち（三人）とともに住んだ。五人の男兄弟は皆太平洋戦争に狩り出されていて、命からがら帰国したタケオさんを待っていたのは、女手ばかりの百姓暮らしだったのである。

照りつける真夏の太陽の陽射しに身を焼きながら、ガンズメ押し、田の草とり……。

津留の家で次女美佐子さんが誕生するが、彼女は赤ちゃんが生まれる日まで田んぼに出て働いた。

三池炭鉱へ

昭和二十年八月十五日、太平洋戦争終る。翌二十一年四月のある日、からくも命をもうけた語さんが帰ってきた。「まさか、二度と会うことなどないもの」とばかり心にきめていた、妻タケオさんのおどろき。

「今から考えますと、ちょうど主人は三井に殺されるためにばかり帰ってきたようなもんです。私の罪でないことがわかっていても、すまない気持でいっぱいで……」

手でそっと目をおさえるタケオさんだが、そのときのうれしさはたとえようがなかったろう。

家族もふえたこと、語さんはさっそく糧てをえるために筑豊の小炭鉱で働いたあと、二十三年の春いよいよ三池炭鉱の三川鉱へ。はじめ三交替の掘進夫だったが、その年の八月、語さんは山鹿の津留から家族たちを呼び寄せ、桧町の現住所に住むことになる。集団社宅のなかでいよいよ、一家の、三池炭鉱労働者とその家族としての生活はスタートした。

三女の豊子さんはここで生まれたが、でもそれが、十五年後に、語さんの命はもちろん、この一家のしあわせをぱっくりとひと息に呑みこんでしまう非情な運命が待つ道に通じていることなど、神ならぬ身の知るよしもなかったのである。

願うことは

語さんは妻思い、子ども思いで、人一倍思慮に富んでいた。楽しみといえば碁くらいで、心から妻子と生活をともにしていた。

三女の豊子さんには、蝉取りなどによくつれていってもらった思い出が少なく、何でもいいやすい父親だったという。

「それでも、いうべきところはきちんときびしい父でした。父が二度人間に生まれかわることがあれば、こんどはきっとしあわせになることだろう、と思います。いやしあわせになるはずです」

にこやかに語る顔つきのなかから、豊子さんのゆるぎない確信がのぞく。

大爆発以後

昭和三十八年十一月九日、三井三池の三川鉱大爆発。そのころ語さんは三交代の払採炭工だったが、その日二番方勤務のために坑内にさがっていったまま、ついに帰ってくることなく終ったのである。つい昨日まで、体調をこわしたために一カ月ほど休んでいた体だったのに、ことさらその日から出勤したのだったと聞けば、よほど運命というものにさからえぬ何かがつきまとっていたのだろう。

歴史的な資本の圧制のもとで苦しい暮らしに耐え、仲間たちと固く手を組みながら、労働者の怒りを爆発させて三池闘争を闘い抜き、組織の分裂と第二組合誕生、以後はますますはげしさを加えながら襲いかかってきた、差別政策と低賃金支配、合理化攻撃。

そして最後には四百五十七人の仲間たちともども、かけがえのない命を奪われていった語さん。

そのとき語さんが行年五十三歳だったが、妻のタケオさんが四十九歳、長女峰さん二十九歳、次女美佐子さんが二十七歳、三女の豊さんが十四歳だった。上の二人の子どもたちこそすでに世に出ていたものの、豊子さんはまだ十四歳で中学一年生だった。

ともあれ、遺族＝古江タケオさんは六十三歳の身をムチうちながら、今日も荒尾アソニットの職場のなかで、脚を棒にしながら編み立て機の前に立っていることだろう。